平常展のみどころ

十二神将立像

木造・彩色　像高99.0～110.7㎝
平安時代（11～12世紀）
重要文化財
東大寺

申神

東大寺本坊中庭の天王殿に伝来した群像。

12躯のうち、子と丑、寅と卯というように、順番に2躯ずつの組み合わせをつくり、それぞれが内側を向き合う構成をとる。甲冑や衣服の形式、あるいは頭髪のかたちなどが少しずつ異なり、群像としての変化を設ける意図がうかがわれる。

頭上に戴く十二支獣の多くが造像当初のもので、本来、別の存在であった十二神将と十二支とが結合した作例として、早い時期のものといえる。寅神や卯神像等の腹部に、獅噛に代えて十二支獣が表されていることも注目にあたいする。また当初の彩色や截金文様が比較的よく残る点も貴重。

作風から12躯を幾つかのグループに分類することができ、複数の仏師による分業制作の実態が想像できる。京都・広隆寺、兵庫・東山寺の十二神将像との比較により、11世紀末から12世紀初頃の制作と推定される。

岩田茂樹
（学芸部長補佐）

丑神

六角宝幢形経筒

銅板打ち出し・ツメ折留め・鍍金
〔中央・右〕永禄二年（1559）、〔左〕弘治三年（1557）
総高13.8～15.9cm
個人蔵

六角形の筒身に笠蓋をかぶせた小さな経筒たち。その大きさ5寸足らず。当初は全体が鍍金で輝き、軒先にはガラス玉を連ねた瓔珞が下がるきらびやかな姿であった。筒身正面には小さな釈迦如来像を鏨で打ち出し、中には法華経八巻をきつく巻き絞めて納めていた。宝幢とはホトケの教えが説かれる場所に立てられた飾り幡のこと。パラソルのような天蓋から、六角ないし八角の筒状の幢身を吊す。平安時代の経筒や鎌倉時代の石造物にこれを意匠化したものが存在するが、その数は決して多くない。この宝幢形が突如、戦国時代に復活し、装いを新たに量産されたのである。「六十六部」と呼ばれる廻国巡礼の聖たちは、この経筒をたくさん携え、全国各地の霊場や寺院に一つずつ奉納したのである。こんなに小さく作ったのは、彼らの背負うツヅラに収納するため。現在残っているのは40点余り。今回はその内の11点をまとめて初公開している。展示品には紀州（和歌山県）や与州（愛媛県）、美濃（長野・岐阜県）、上野国（群馬県）などからやってきた聖の名前が見える。年号を「當年今月日」とぼかして刻んでいるのは、巡礼の旅が長い歳月にわたる覚悟を表している。苦難に満ちた聖たちの旅路を、その背中から見ていた可愛らしい経筒。聖にとっては愛娘のような存在だったに違いない。

吉澤　悟（教育室長）

開館予定（1月～3月）

■開館時間
午前9時30分～午後5時
※1月24日（土）・2月3日（火）・3月12日（木）は午後7時まで

■休館日
月曜日（祝日の場合はその翌日）、1月1日（祝）
※3月2日・9日は、月曜日ですが開館します。

観覧料金

平常展・特別陳列

	一般	高校・大学生	中学生以下
個人	500円	250円	無料
団体	400円	200円	

*団体は責任者が引率する20名以上
*中学生以下、70歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方は無料です

〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車
※当館には駐車スペースがございませんので最寄りの県営駐車場等（有料）をご利用ください。

奈良国立博物館
Nara National Museum

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。
※返信用封筒には宛名を明記し、長形3号の場合は90円切手を、角形2号の場合は120円切手を貼付してください。

〒630-8213 奈良市登大路町50（奈良公園内）　TEL. 0742-22-7771　FAX. 0742-22-7221　テレホン・サービス 0742-22-3331　ホームページ（URL）http://www.narahaku.go.jp/